

入院棟の六階にある談話室からは、都心が一望できた。私は、窓際のテーブルに付き、夕暮れのビルの群れを眺めた。高層ビルが赤く染まり。それがだんだん薄くなつてやがて紺色になった。窓には無数の明かりが輝いていた。手術後の強い痛みで一時的に忘れていた生活への不安が私の胸に兆した。蓄えが尽きかけていた。仕事が見つかるだろうか。いつから働くことができるのだろうか。

入り口に表れた老人が遠慮がちに私に近寄ってきた。

「失礼ですが、澤本さんでしょうか。この階の事務所でうかがったら、こちらだと言われましたので」

老人は私の名前を口にした。

「はい、そうですが」

「そうですか、あなたが澤本さんですか」

老人は私の顔をしげしげとながめ、ため息をついた。

「いや、これはご無礼いたしました。私、

手島と申します。間違っていたらごめんなさい。澤本さんSNSというものをやっておられますか」

私の不審そうな表情に慌てたのか、老人は早口でそう言った。

「はあ、やっております。あなたもやっておられるのですか」

私は数年前からSNSを始めのだが、プロフィールでは本名を名乗り、実物の写真を添えた。連絡をくれた人には、顔写真を入れ本名でダイレクトメールをやり取りす

るようにお願いした。ハンドルネームでのやり取りで苦い経験があったからだ。自分のページには、風景のスケッチを投稿し、日々の生活の様子も記した。道端の小さな花や公園で見かけた小鳥の動画も載せた。

「いや、私はこの歳ですからそういうものはやりません。アカウントというのですか、あれは持っていません。ただ、パソコンは持っているのです、あちこちネットを見ておりましたら、あなたの記事に行き当たりました」

「ああ、そうですか。じゃあ、私がどういう人間であるか、ご存じなのですね」

「ええ」

私は、プロフィールのページで自分がゲイであることを明らかにしていた。165×72×70と数字を並べたが、これは。身長165センチ、体重72キロ、年齢70歳という意味である。この世界では体型や年齢は重要な情報である。またネットの世界で男性の性的マイノリティを指す「組合員」という隠語を数字の横に記し、その下に「年輩の穏やかな方との永いお付き合いを望みます」と書き添えた。

「もし、よろしかったら少しお話しができませんかと思いましたが」

手島はひどく緊張した様子でその言葉を口にした。固く握った手がかすかに震えていた。

「はあ、どうぞ」

私はそう言って、向かいの席に向けて手を広げた。

「驚かれたでしょうね。申し訳ありません。あなた様の写真や動画を見て、なんというのですか、いや、まあ、俗な言葉になりますが、すっかり惚れ込んでしまった、とで

も言えばよいのでしょうか」

「そうですね。ありがとうございます。それにしても、よくこの病院がわかりましたね」

「ええ、ここに入院していたことがあったんです。窓から撮った写真がSNSに載っていました。見覚えのある景色でした。ひよっとして、と思い、駄目元で来てみました。以前入院していたので、受付の人は顔見知りでしたから、あなた様の名前を告げるとすぐに通してくれました。本名だったのですね」

そう話しながら、手島は椅子を引き腰を下ろした。私はあらためてこの老人の顔を見た。八十少し前だろうか。小柄で小太り、首が太く胸が厚かった。下町の優しいおじいちゃんといった雰囲気の人だ。眉毛が太くその下の目は涼しげに細かった。鼻は大きめで鼻翼が形よく張り出している。豊かな頬は血色がよい。なかなか立派な顔立ちである。

「お近くですか、お住まいは」

「近くというわけでもありません。バスと電車を乗り継いで小一時間ほどでしょうか。以前ここに入院したのは、家の近くの病院の先生がこちらに移られた関係です」

「そうだったんですか。私も今住んでいるのは郊外です。昔、この近くに住んでいたのです、この病院にはなじみがあったものですか」

「ここは対応が丁寧で看護師さんもよい方ばかりですね」

「そうですね。気持ちよく入院させてもらっています」

「病院に押しかけてきて申し訳ありません。これは一種のストーカーですな。でも、と

にかく一度お会いしたかったものですか」

「そうですね。ところで手島さん、ご家族は」

と私は訊ねた。これは大事なことである。この年代の人は、ゲイであっても女性と結婚して家庭を持っている場合が多い。私の付き合いが家庭を壊すことになっては申し訳ない。そこまで行かなくても、もし私と深くつき合うことになれば、家族に嘘をつかなければならない場合もでてくるだろう。

「一人でくらししております」

手島はきっぱりとそう言った。私が疑ったことを怒っているのだろうか。

「いつまでご入院ですか」

手島は語気を強めたことを恥じるように柔らかい笑顔を作った。

「はあ、まだ退院の日には決まっています」

「またおじゃましてもよろしいでしょうか」

「ええ、どうぞいらしてください」

「そうですね、ありがとうございます」

手島は目を輝かせて立ち上がり、何度も頭を下げて部屋を出て行った。

2

手島が去った後、私はすっかり暗くなった窓の外をぼんやり見つめ感慨にふけた。私の脳裏から手島の顔と姿がいつまでも消えなかった。老人ながら、私好みのいい男だったのだ。こんな感情が心に兆したのは久しぶりだった。長年深い付き合いのあった成宮のことが思い出された。

私が成宮と出会ったのは、仕事の関係で

あった。私は専門学校でデザインを勉強した後、中堅の建設会社で営業の仕事に就いていた。設計の仕事には私の資格は不十分だったのである。ある時、うちの会社で設計施工した病院の、ロビーの出来を施主が嫌悪し、金はいくらでも出すからやり直してもらえないか、という依頼を受けた。施主は内装の設計を成宮誠一郎に依頼してもらいたいと強く注文をつけた。成宮はその筋ではよく知られた建築家であり、特に建物内部のセンスの良さには定評があった。上司は、多忙な成宮が一病院のロビーのやり直し設計を引き受けるはずがないと踏み、施主を納得させるため、一応成宮と交渉したことにしてくれと言った。私もそのつもりで、とにかく会うだけ会ってもらおうと思った。私は、成宮に会う前に、彼の設計した建築物を見ておきたいと思った。首都圏にあるいくつかの作品をみて私は驚いた。建物が語りかけてくる、とても表現すればよいだろうか。とにかく、私がかれまで見たどの建物とも違っていた。特に玄関ホールの空間は、そこに居るだけで、深い安らぎとともに、何か人生に対する希望のようなまで与えてくれた。

好き嫌いの激しい人だと聞いていたので、恐る恐る電話したが、何かよいことがあったのか成宮は上機嫌で、「一度事務所に来てくれ」と言った。私はすぐに事務所へ飛んでいき、まず、成宮の設計した建物を見学した時の感動を伝えた。成宮は照れて顔を赤くした。案外シャイな人なのだな、と思った。意外にも成宮はその仕事を引き受ける、と言った。成宮の出した条件は、施工を成宮が知っている小さな建設会社にやらせることだった。

二度目に成宮の事務所を訪ねた時、成宮はおずおずと「ワシの夕食につき合ってくれないか」と言った。私のことが気に入ったようだ。私が三十過ぎ、成宮は五十半ばであった。

成宮の担当になり、私は六本木にある成宮の設計事務所に通うことになった。事務所にはいつもかすかに良い匂いがした。甘く爽やかな香りの奥に、ある種の野生を感じさせる不思議な匂いだった。

一緒に仕事をするようになって、私は成宮の人的魅力に強く惹かれていった。成宮は大きなふくらした体つきをした学者タイプの男だった。スポーツは好きではないと言っていたので、体格の良さは家系的なものかもしれない。初老と言ってよい歳なのに色が白かった。見事に禿げ上がった丸い頭の中には、どれほどの知識が詰め込まれていただろうか。とにかく物をよく知っていた。四十台にヨーロッパを巡り古い建築物をつぶさに研究したそうだ。成宮の大きな手に握られた鉛筆が見事なスケッチを生み出していく様子を、私は手品でも見るような思いで眺めた。成宮は東京生まれで裕福な家に育ったようで、三十半ばで離婚し、それからずっと一人暮らしだった。成宮は疲れ知らずの男だった。八時、九時に仕事が終わってから、私を行きつけのバーに誘った。帰れなくなって事務所に泊まったこともあった。

成宮が設計し直した玄関ホールは評判になり、遠くからも病院関係者が見学に訪れた。成宮は気を良くして、自分の持っていた有名な日本画家の作品を寄贈した。それがホールの壁に飾られたので、また評判になった。

私の社内での評価は上がったが、設計部からは疎まれた。病院を設計した人たちの顔を潰したことになるのだ。特に設計部長からは、会うたびに嫌みを言われた。社内には、私と成宮の関係について疑う人たちもいた。成宮には同性愛の噂があったのだ。噂だけでなく、実際成宮は同性を愛する男だった。私は、それまで自分の性的指向について深く考えたことはなかった。女性とつき合うことに情熱が湧かず、自分が回りの男性と違っているな、とは思っていた。成宮と過ごすことによって、私は、自分が同性を、しかも年輩の同性を強く愛する人間であることにはつきりと気がついた。後から知ったことだが、ゲイの中には、私のように専ら年輩者や高齢者を愛する人たちがかなりのパーセンテージで存在した。よい言葉ではないが、この世界では老け専（ふけせん）」と呼ばれていた。「老け専」の人たちは、世の中をよく知り、様々な経験を積んだ相手方との良好な永い関係を築くことも多かったが、その場合には、高齢によるパートナーの死という悲しい現実を覚悟しなければならなかった。

成宮に「仕事を手伝ってほしい」と頼まれて、私は会社を辞めた。成宮が私に頼んだ仕事は、成宮の作った建築物に相応しい家具を調達する仕事だった。成宮は、施主と交渉して、ヨーロッパのアンティークな家具や日本の伝統的な家具を部屋に搬入した。自分の仕事は家具まで含めて完成するのだ、と成宮は言った。

成宮が「いっしょに暮らさないか」と言ってくれた時、私は目が眩む思いがした。奇跡が起こったと、私は有頂天になった。成宮の素晴らしい知性と、優しさと、ふく

よかな体の全てが自分のものになるのだと思った。

それから成宮が亡くなるまでの十八年間の間に体験したあれこれの出来事は、私の記憶の中で、決して衰えることのない光芒を放ち続けている。成宮は事務所近くにマンションを借り、私たちはそこで生活した。家事は折半で分担することになっていたが、成宮があまりにも多忙なので結局私の分担が多くなった。成宮は洗濯や掃除、家の修理などはよくやってくれた。買い物を頼むと、成宮は高いものばかりを買ってきた。

親子ほど歳が離れている上、仕事のキャリアが大きく違っていたので、全くの対等な関係ではなかった。しかし、成宮は、大きなことも小さなことも私に意見を求めた。一方的な関係にならないための成宮の工夫だったのだろう。

忙しい中をやりくりしながら、私たちは国内外の旅行に出かけた。成宮は、親しい友人には私を「仕事と生活のパートナーだ」と紹介し、「私たちは深く愛し合っている」と明け透けに言っていた。

成宮が突然事故死した後、私の小さな会社は経営が危うくなり、二年後に倒産した。成宮という後ろ盾をなくして、取引先が激減したのだ。私はいくつかの小さな会社に雇われて生計をたてたが、六十を過ぎてからは、非正規でマンションの管理人や警備員などの仕事に就いた。この二年ばかりは工事現場の監視の仕事などで立ち仕事が続いた。それが原因で膝を痛め、左足に人工関節を入れることになった。入院はそのためのものではあった。六十五歳から年金は支給されたが、厚生年金の加入期間が短かったので額が少なく、働き続けなければ生活

が成り立たなかった。

3

その後、手島は二度病院に来てくれた。いずれも私がリハビリ室でリハビリをしている時だった。手島は、私が苦しそうにすると、まるで自分が痛みを感じているかのように顔を歪めた。退院が近いと知った手島は、肩書きのない名刺を渡し、落ち着いたら連絡をほしと言った。見舞いだと言って祝儀袋を置いていった。「お見舞い」と毛筆で書かれた字が美しく力強かった。中に五万円が入っていた。SNSの写真に写り込んだ私の部屋の様子から、決して豊かでない私の暮らしを察知したのであるか。お金に困っていない人なのだろうか、あるいは非常に無理をしたのだろうか。多すぎる金額に、私は戸惑ったが、とにかく有り難かった。働き口が決まれば、その時恩返しのようなものができるだろう、と考え、そのまま貰っておくことにした。

退院してから一月半たって、私は手島に誘われて国立新美術館に出かけた。年間千円で手にはいるシルバーパスを持っていたので、バスと都営地下鉄を乗り継いで、会場まで金をかけずに来ることができた。杖はほとんど必要なかったが用心のため縮めてリュックに入れてきた。

手島は、三角錐の形をした風変わりなガラス張りの入り口の前で待っていた。地味な服装だったが、首の後ろの髪がきれいに刈り上げられていた。今日の日のために床屋に行ったのだろうか。

「解りましたか」

手島は、笑顔で訪ねてきた。

「ええ、以前来たことがありますので」「そうですか」

成宮がこの建物の設計者と知り合いだったので、その人の案内で成宮と一緒にこの建物の中を巡ったことがあった。一般公開される前のことだった。そのことを話そうかと思ったが、私は思いとどまった。自慢っぽく聞こえるのではないか、と思ったのだ。

私たちは肩を並べ、入り口を通り中に入った。特に人気のある企画がないのか、館内は人影がまばらだった。

「こちらです」

手島は二階に上がるエスカレーターに顔を向けた。二階に上がると、正面の会場で書道展をやっていた。入場無料だった。手島は受付の二人の年輩の女性を知っているようで、軽い冗談を言いながら、名簿に名前を書いた。見事な字だった。私は病院で貰った祝儀袋に書かれた立派な字を思い出した。手島は書道を嗜んでいるのだろうか。

私は、手島の横に名前を書くのが恥ずかしかったが、そうも言っていられないので、素早くわざと乱暴に署名した。

次から次へと連なる展示部屋には、様々な字体の書が展示されていた。薄い墨でわざと滲ませた作品もあった。赤い色で書かれた書もあった。自由な雰囲気のある会派なのだろう。一番奥の展示室で手島は立ち止まった。畳一畳分ほどもある和紙に草書体で流麗な字が書かれていた。和紙は、飾り気のない白い金属の枠で簡易な装丁が施されていた。三文字目が「の」、六文字目が「に」、その次が「君の」。それだけは読めたが、あとは判読できなかった。作品の横に「手島省一」と書かれた小さな札が貼っ

であった。手島の作品なのだ。

「立派な書ですね。でも済みません、何て書いてあるんでしょうか、僕には読めないところがあつて」

「ええ、ええ」

と言つて手島は声を低めた。

『改札の流れに君がアロハシャツ』、と書きました。アロハシャツは当て字の漢字にしてあります。ア、はアジアの亜、ロは風呂の呂、ハは波、シャツは衣偏に親とその下にもう一度衣です」

「ほう、そうですか」

そう言われてみれば、冒頭の字は「改」二文字目は「札」と読める。アロハシャツも何とか読める。アロハシャツが男の着るものだとすれば、作者は女性であろうか。もし作者が男性だとすれば、男性同士の思いを書いたものかもしれない。いずれにしても大きな駅で待ち合わせの場面を書いているのだろう。アロハシャツを着てくるくらいだから打ち解けた関係ではないだろうか。改札の人ごみの中に鮮やかな色のシャツを着た恋人を見つけた時の喜びが伝わってくる。

「手島さんのお作りになった句ですか」

「いや、私は俳句はやりません。ネットに『シニアパラダイス』というホームページがあつて、高齢の同性を愛する人たちが小説やエッセイ、俳句なんかを投稿していました。そこに載っていたこの俳句が気に入りました。何とか、書にしてみたいと思つたのですが、どうして良いかわかりません。ページの中に、お世話係りの方のメールのアドレスがありましたので、メールを出したところ、返事が来て、許可をいただくことができました」

「そうですか。いい句ですね。手島さんもこういう経験がおありだったんですね」

「いや、まあ」

手島は言葉を濁した。

「こんな関係を作れるといいなあ、と思つたんです」

「そうですか」

手島は、これを見せたくて私をこの美術館にさそつたのだろう。手島なりの愛情の告白なのかもしれない。手島の言葉が本当ならば、まだ男同士の関係に疎いのだろう。しかし、この歳になるまでそんなことがあるだろうか。手島は年輩者には人気のある、いわゆる「もて筋(すじ)」の容姿を持つている。上野や浅草に行けば、いくらでも相手がみつかるはずだ。あるいは、以前のパートナーのことは話題にしたくないのかもしれない。その気持ちは私にもよくわかつた。

「そろそろお昼にしませんか」

そう言つて、手島は腕をひねつて時計を見た。

「そうですね。どうしましょうか」

こういう美術館の食堂は一般に値段が高かつた。レストランに入れば、手島はおそらく自分が勘定を払うというだろう。それに甘えるのは良くないような気がした。

「一階に、飲食ができるテーブルがあります。作ってきたものがありますから、一緒に食べませんか」

そう言つて手島は、手にしたトートバッグをちよつと持ち上げて見せた。

「そうですか、ありがとうございます」

心配りのできる人なのだな、と私は感心した。

「食事のできるテーブルは、建物の中にも

外にもあります。どっちがいいですか」

下りのエスカレーターに乗って、手島は私を振り返って言った。

「外にしましょうか。中は、何となく圧迫感がありますね」

私はそう答えた。

底面がレストランになっている大きな逆三角錐状のコンクリートの建造物が今にも倒れて来そうで落ち着かなかった。そう言えば、成宮もそんなことを話していた。

「そうですね。同感です」

一階に着くと私たちはフロアを横切って外のテラスに出た。十ほどのテーブルが並び、どのテーブルにも「飲食可能」と紙の札が貼ってあった。

手島はトートバッグから次々とタッパを取り出した。透明な容器の中におにぎりやいなり寿司や団子が見えた。水羊羹のようなものも見えた。手島は自分が作ったのだ、と言った。そして、こういう物を作って売る小さな店をやっていた、とつけ加えた。

どれも美味しかったので、私は夢中で食べた。手島はほとんど食べず、満足そうに私が食べるのを眺めていた。私は、成宮には無かった、好ましい庶民性と慎みしさのようなものを手島に感じた。

駅で別れる時、もっとこの人と一緒に居たい、という感情が、私の胸に突然押し寄せてきた。

それから二週に一度ほど、手島は私を上野の美術館にさそった。いずれも有料の絵画展だったが、手島は招待券を持っていた。私は、お礼に、手島を自宅に招待しようと考えた。そのことを伝えると、手島は驚いたようだったが、顔を紅潮させ「是非お伺いします」と言った。私は、早朝のビル掃

除の仕事に就くことができたので、精神的にも少し余裕が生まれていた。自宅に招き、ありのままの自分の生活を見てもらいたかった。手島とならば、今一度成宮と同じような、あるいはそれ以上の親密な関係が築けるかもしれない。そんな予感がした。招待はその第一歩だと思った。

4

私は二時間かけて作った五種類の料理を手早くテーブルに並べた。冷蔵庫の扉を開け、缶ビールを取りだし、それもテーブルの上に出した。そろそろ手島がやってくる時間なのだ。

アパートの鉄の階段を上ってくる手島の足音が聞こえはしないかと、私は耳をそばだてたが、足音は聞こえなかった。今か、今かと待っていたが、十二時を十分過ぎても、手島がやってくる気配はなかった。私が渡した地図が解りにくくて、道に迷ったのだろうか。それなら電話をかけてくるのではないか。

私は入り口のドアに鍵をかけ、階段を下りて通りに出た。坂道を下りてくる人影はなかった。坂道を上りきると、平坦な細い道は左右に分かれる。左に行けばバス通りに出てたJRの駅まで十五分だ。右にいけば、やはりバス通りにでて地下鉄まで十分だ。どちらから来るかわからない。どちらかの駅の方に進めば、行き違いになる可能性がある。

ポケットに入れた携帯がブルブルと震え鈍い音をたてた。取りだしてみるとショートメールが来ていた。「本当に申し訳ありません。急な事態が生じ、お伺いすることができなくなりました。手島」と書かれてい

る。どうしたのだろう。とりあえず「了解しました。澤本。」と返事を出したが納得がいかなかった。坂道を引き返す途中で、手島に電話したが「おかけになった電話は電源がはいっていないか電波のとどかない……」のアナウンスがながれた。電源を切っているのだろう。

アパートに帰ってテーブルに付き、私はぬるくなったビールを飲みながらあれこれの可能性について考えた。急病だろうか、いや急病ならば、そう書くだろう。事故だろうか、事故ならば、そう書くだろう。家庭内のトラブルだろうか。最初に会った時、私は「ご家族は」と訊いた。手島は「一人で暮らしている」と言った。一人で暮らしていることは事実としても、家族がいなことは限らない。結婚したことがあり、子どもがいる方が自然だろう。妻もいるかもしれない。もっとよく家族について聞いてあげればよかったのだろうか。

家族の「妨害」によって、私の家に来られなくなった可能性は高い。成宮との死別の後、二度ほど経験した。一人暮らしのゲイであっても、子どもや兄弟姉妹との行き来がある場合には、その人たちが「妨害」することがある。身内にそういう人がいることが恥ずかしいといった世間体を気にすることが多いが、遺産相続の問題がからむことがある。当てにしていた老人の遺産が、遺言によって同性愛のパートナーに渡ってしまう可能性もあるからだ。こちらにそうした意図がなくても、遺産を期待している人たちは疑り深く過敏な反応を示すものだ。見舞いの五万円をそのまま貰ってしまったのはまずかったかもしれない。その後も世話になりっぱなしだった。身内にそのこ

とが伝わっていけば、私と親しく付き合うことにその人たちが反対するのは大いにありうることだった。

あるいは家に招くのが早すぎたのだろうか。一人で相手の家を訪れることは、この世界では抜き差しならぬ関係になることを意味すると受け取られがちだった。

その日の夕刻、私のアパートを手島の弟と名乗る人が訪ねてきた。手島を一回り大きくしたような感じの男だった。どこかの会社で役員をしてきたような落ち着きが感じられた。男は深く頭をさげ「これは、兄が今日ここに持つてくるはずだった土産です」と言って、紙袋から箱を取りだして差し出した。銀座に本店のあるフランス菓子店のものだった。

「それは、どうもありがとうございます。よろしいんでしょうか」

私はそう言って箱を受け取った。

「兄が大変失礼なことをしたようで、本当に申し訳ありません」

手島の弟はもう一度頭を下げた。何か事情があるようだ。

「お入りになりませんか。狭いところですが」

私が大きくドアを開けると、弟は「そうですね、では失礼して」と言って部屋に入ってきた。私は居間のテーブルに案内した。

「お兄さんのために用意したものがありませんが、召し上がりますか」

と声をかけると「せっかくだからいただきます。兄の代わりと言ってはなんですが」と言った。物のわかる人のようだ。私は、冷蔵庫から皿を取り出し、ビールと一緒にテーブルに運んだ。

手島と飲んで食べるはずのものを、手島に似た弟と飲食するのは不思議な気持ちでした。

実は、と言って弟が話しはじめたのは概ね次のようなことであつた。

5

兄と私は五歳年が離れています。兄は子どものころから仲がよく、今も近くに住んでいます。家族に話しくいようなことにも私には話してくれました。私と兄の間にはもう一人兄がいましたが、小さい頃になくなっています。父親に定職がなかつたので家が豊かでなく、兄は中学を卒業すると親戚筋の紹介で和菓子店に勤めました。兄が働いてくれたおかげで、私は高校にもそして夜間でしたが大学にも行くことができました。兄には本当に感謝しています。兄は結婚が遅れましたが、それでも子どもを授かり、小さいながら自分の店も持つて幸せに暮らしていました。私の口から言うのも何ですが、申し分のない夫、そしてよき父親であつたと思います。八年前につれあいを亡くしてから、兄は非常に落ち込んでしまいました。店も畳み、一人家に引きこもるようになってしまったんです。息子夫婦も親戚筋も心配していました。私も、こりや長くないんじゃないか、と思つたくらいです。ところが、三年ほど前に、兄が元氣を取り戻してきました。きっかけはよくわかりませんが、商店会の会長さんをしておられた方との個人的なお付き合いが始まつたらしいのです。

その元会長さんには私も何度か会つたことがありますが、氣風がよく親分肌の人で

す。週刊誌にも載つたことのある有名な洋食店をやつておられた方でした。恰幅がよく、正月に紋付き袴で店々に挨拶回りをすると、買い物客が立ち止まって見つめるほどの男っぷりでした。兄も、以前からこの元会長さんを尊敬し、憧れていました。この人も夫人を亡くしていたので兄の気持ちがよくわかつたのでしよう。時々兄の家を訪ねてくれました。外に出ることもままならなかつた兄ですが、この元会長さんの家にもおじやまするようになり、二人で、あるいは数人で旅行に出かけるようになりました。

この人が兄に「新しい世界」を見せてくれたようです。兄は、息子やその連れ合いには話しませんでしたが、私には元会長さんとのことを話してくれました。私は驚きました。兄は、全く心当たりがなかつたことではありません。一緒に育てば、いくつかの兆候が見てとれるものです。学校時代にはガールフレンドを作ることなく、男の教員と仲良しになりたがりました。兄は、絵が上手で人物画も描いていました。男の人も女の人も描きましたが、男性像の方が圧倒的に出来がよかつたです。兄も何か感じるころはあつたと思いますが、まさか自分が、当時忌み嫌われ、精神的な病人のようにも言われていた同性愛者であるとは夢にも思つていなかったでしょう。もちろん結婚してからは、そのような性向はおくびにも出さず、ひたすら良き家庭人であろうとしてきました。連れ合いを亡くし、隠れていた兄の性的指向が束縛を逃れて表に出てきたのかもしれない。同性愛に対する世間の風当たりも以前にくらべてずっと穏やかになつたこともあるでしょう。

元会長さんとお付き合いは長くは続きませんでしたが、この方は、一人の人の永い付き合いは好まない方の方でした。兄のほかにもつき合っている同年代の男の人がいました。どういう訳か何人かの女の人とも深く関わっていました。そういうことができる方の方です。あるいは女性とのつきあいは同性愛を隠すためのカムフラージュであったのかもしれませんが。兄は会長さんの「艶福家ぶり」を知って、ぶつかりと会長さんと会わなくなりました。

それから兄は、同性愛の指向を持つ年配者が集まる酒場やカラオケ店や出会いの場所に入りするようになりました。でも、なかなか兄がつき合ってみたいと思う人には出会えなかったようです。兄が「この人なら」と思う人は応じてくれず、逆に「お付き合いは遠慮したい」と思う人が近づいてくるが多かったそうです。男性の同性愛は、好みがなかなか厳しいようです。短期間のセックスフレンドを望む人や、また女性と結婚している人もかなりいたみたいです。兄は不慣れなパソコンを使ってネット上でもお付き合いのできる人を探していました。

この半年あまり、兄は実に活き活きと生活を楽しんでいるように見えました。あなた様のお陰に違いありません。

今日、兄がここに来ることができなかった理由については、家の恥をさらすことになるので詳しくお話しできませんが、息子とその連れ合いの猛烈な反対、脅しに兄が抗しきれなかったとだけお伝えしておきます。兄は、あなたの家に招かれたことが嬉しくて有頂天になり、うっかり近所に住む息子に話したためにこんなことになってし

まいりました。

これは私からのお願いですが、どうぞ兄と仲良くしてやってください。兄もあと何年生きるかわかりません。もし万一、あなた様と兄が生活の場を共にするならば、兄はどんなに喜ぶことでしょう。しかしあの歳ですから、遠からず心身を患うことになると思います。その時に、あなた様に面倒をみて貰おうなどは考えておりません。兄の息子のところでは、どうせろくな介護は期待できないので、いざとなったら施設にはいつてもらうつもりです。そのための費用を息子が出し渋るようであれば、私が出すつもりです。これは兄への恩返しです。私の連れ合いもそのようにしたらよい、と言ってくれています。

ただ、そうなるまでの間、もしお願いできれば、兄が楽しく活き活きと暮らしていけるようにあなた様の力をお貸しいただけないでしょうか。

6

手島の弟が訪ねて来てから三日後のことであった。早朝のビル清掃から帰って部屋で一息ついている時に、ポケットに入れた携帯電話から着信音が聞こえた。取り出してみると、画面に手島の名前はなく、「非通知」となっていたが、手島からの電話だろうと思った。何かの理由で携帯が使えないのだろう。公衆電話からかけてきたのかも知れない。私は、大急ぎで通話ボタンを押した。

「はい、澤本ですが」

「手島です。取り返しをつかないことをしてしまいました」

手島の声は聞き取りにくかった。いつも

とまるで声の調子が違っていた。

「弟さんにもお伝えしたけど、何とも思っていないです。もし、手島さんさえよかつたらまたお会いしましょう」

できるだけ早く一度会っておきたかった。

「はあ、ありがとうございます」

「明日も午後は空いています。とりあえずJRの新橋駅あたりでお会いできませんか」

新橋駅なら手島の家と私のアパートのちょうど中間である。どちらからも地下鉄浅草線で一本だ。サラリーマンをしていた頃に乗り降りしていた駅なので土地勘もある。駅のすぐ近くに、安くて美味しい料理屋や飲み屋がたくさんある。もし手島が望めば、同好の年輩者が集まる明るい店に行くこともできる。

「わかりました。新橋駅ですね。どちらの改札口がいいですか」

「南がいいでしょうね。二時頃でいいですか」

時間もはっきりさせ、ここできちんと約束をとりつけておいたほうがよいと思った。

「ええ、いいです」

「この前、書道展で見せていただいた俳句を思い出しました」

「何でしたっけ」

『改札の流れに君が亜呂波襯衣』ですよ」

「ああ、あれですか」

「あの場面のようなことになりますね」

「じゃ、まだ少し早いけどアロハシャツを着ていくことにします。俳句にあやかっただけの思い切り目立つやつを」

手島の声によくやく明るさが戻っていた。